

白糠高に開設された室蘭工業大のサテライトオフィスで大学教員と議論する町民ら



新産業創出プロジェクトへ

室工大 白糠高に研究拠点

【白糠】室蘭工業大が、白糠高校の空き教室にサテライトオフィスを開設した。町特産のシソの成分を使った食品開発など、同大が町や民間企業と取り組む新産業創出のプロジェクトの拠点とする。同大の研究チームのメンバーは、白糠高が4月から始めた町内の環境を学ぶ学科の講師を務め、生徒たちもプロジェクトに参画する。

道教委などによると、道内の公立高に大学が研究拠点を設けるのはまれ。サテライトオフィスは、同大が道教委から有償で借りた広さ147平方メートルの旧L教室に3月中旬に開設された。大型モニターやパソコンを配備。徳染清孝教授生

物化学」をリーダーとする教員と学生の研究チーム約100人が交代で月数回利用する。

同大は2013年に町特産のシソの成分にアルツハイマー病の発症を抑える可能性があることを発見、町内に自生する植物の成分も研究している。昨年11月には、町や北大、総合化学メーカーのカネカ（東京）、NTT東日本（同）など12機関と、健康効果の高い特産品の開発など、新産業創出を目指すプロジェクトをスタートさせた。

シソ成分使った食品開発目指す

「環境鮮麗学」を導入。同大の教員十数人が交代で講師を務め、生徒に植物の成分や食品開発のための研究に携わる場を提供する。

サテライトオフィスでは3月中旬、新産業創出に向け町民の意見を聞く会合が開かれ、同大関係者や町民約50人が参加。町内の酪農家伊深佑樹さん（39）は「肥料が高騰しているが、肥料になる微生物の研究を提案され、前向きになれた」と笑顔で話した。

研究チームは今後、定期的に町民と意見交換し、新たな研究につなげる計画。徳染教授は「研究成果をもとに、町内に豊かな資源があると町民や高校生に伝え、新産業創出につなげたい」と話す。

（佐竹直子）